

ヒーリングタウン ささぐり

おへんろ道編

⑥

「あら、遠慮せんでおいで」。常連の参拝者を見つけると、印美代子さん(87)は声を掛け、「納経所」に招き入れた。篠栗町から飯塚市へ抜ける峠道の半ば、郷ノ原地区には六つの札所が集まる。そのうちの一つ、5番札所・郷ノ原地蔵堂

を、印さんは2000年ごろまで約20年間にわたり守ってきた。

篠栗八十八カ所の札所は約4分の1が寺院。他はお堂で、地元の住民らが「守堂者(堂守さん)」として代々、管理している。お堂の札所で、おへんろさんはお経などを上げた後、証しとして本尊名などを記した朱印・黒印を「納経所」で押す。



常連の参拝者と納経所で談笑する印美代子さん(左端)。「お参りしてくださる皆さんのおかげで、私はもっとります」と話す

札所支える地元の力

5番札所はお堂の隣に「納経所」があり、印さんは今もほぼ毎日、ここで午前中を過ごす。「あんまりよそに行く気はせんですね」。屈託なく笑

う。

5番札所の堂守さんは現在、印さんの長男和博さん(65)。和博さんは八十八カ所の管理者でつくる篠栗四国霊場会の会長も務める。和博さんが朝7時ごろ開けたお堂の掃除やお供えの

営んでいた豆腐店から豆腐とおからを運び、仮のお堂前でおへんろさんに料理を振る舞う「お接待」を始めた。心のこもった料理に、おへんろさんたちは新しいお堂を建てるための資金を寄付した。町内からも続々と善意が寄せられた。「忘

札所の管理には苦勞も多し。さい銭泥棒が後を絶たず、手を焼いた時期もある。さい銭の減少とともに泥棒も少なくなったが、掃除の担い手たちの高齢化は進む。

町中心部を見渡す丘の上にごみのない境内。「いつもこの通り。ほっとする。藤さんは散歩がてら、お堂の様子を見るのを日課にしている。

花替えなどを、印さんは9時ごろに行う。「ここに参られ仏様を拜む方は素晴らしい人ばかり。皆さんの元気を吸収しております」ただ、試練もあった。印さんが堂守さんだった1990年12月、昼前に起きた不審火でお堂と本尊が全焼した。責任を感じた印さんを、いつも巡拝していたおへんろさんたちが励ました。

JR篠栗駅から多々良川を渡った高田地区。32番札所の高田十一面観音堂は、伝統的に地元約20軒でつくる組合が管理する。

札所の掃除は、2軒が1組になって1週間ずつ担う仕組み。毎朝6時ごろから1時間ほどかけ境内を掃き、本尊や脇の仏像に茶を供える。境内にはこみ一つなく、すがすがしい空気が広がる。「前の当番さんから受け継いだ通りに引き渡したい。みんな責任を持っている」。組合代表者の藤守さん(86)は話す。

納経所

朱印(札所番号印、本尊を象徴する梵字)・ほんじい印(札所名の印)と本尊名を記した黒印の一式が設置された場所。堂守さん管理のお堂では、境内の一角、近隣にある堂守さん宅の玄関前、へんろ宿の館内などが納経所のある場所として一般的。寺院では境内に納経所があり、住職らが筆による墨書で、本尊名などを記してくれる。

「涙を流したら罰が当たる」。涙を流して語る印さん。92年秋、現在のお堂が完成した。



堂守さん

街ひと物語



福岡県
福岡市
篠栗町
佐賀県